
セブンスポイズン

奏 タカシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セブンスポイズン

【Nコード】

N8665S

【作者名】

奏 タカシ

【あらすじ】

この世は魔法に支配された世界。

その名も『ハムロニ』

昔は魔法など存在すらしてなかった。

だが、西暦2058年、第26次世界大戦勃発の時、突如現れた聖獣寺騎士団と名乗る軍団により戦争が1日で終わった。

生存者の話によると、手から球が飛び出したなどと

奇妙な答えが出たことにより、騎士団の使う武器は、魔法と称されたそれから早、5年、魔法が世界に広まり、騎士団は世界を征服した

のだった。

これは、その世界に反逆した7人の少年少女達の物語。

僕は

魔法の森、ピュアガーデン

俺たちはその孤児院に身を潜めていた
だが、騎士団の護衛に孤児院は見つか
り
貞世先生や沢山の友人を殺された。

この世界は魔法を使えないと殺される世界なのだ。

生き延びたのは、部隊リーダー俺。立花 和

トラップ使いの、西木 朱里

武器調達の、藤原 聡

食糧調達の、橋本 翔

調理の、福本姉妹で姉の美月と妹の知美

そして、服リーダーの萩尾 秀介だ。

俺たちは軍隊、セブンスポイズン

魔法使いに反逆するものである。

「カズ！ここらへんには騎士団はいないようだぞ。」

詮索からシュウスケが帰ってきた。

「そうかあ。まあここまで来れば騎士団も追ってこないだろう！」

「ここらで休憩にしようよ。」

ともみんな駄々をこねはじめた。

「ですね。周りにトラップも仕掛けてきましたし、ここらで休むの

も悪くないと思うわ。カズ！指示を」

「そうだな、疲れも溜まっているしここら辺で休憩をしようか。」

もう、10時間も歩いていたら無理もない。僕たちはここで休憩
をすることを決定した。

「カズ、ごめんなさい。また、ともみが迷惑をかけたみたいで、姉
として謝るわ。」

ミッチが申し訳そうに、頭を下げてきた

「ミッチ！気にしないで、ともみだけじゃなく、みんなもう、限

界なんだよ君が謝ることじゃない、それよりか危険な作戦に君の妹を巻き込んでしまっている僕が謝るべきなんだ、すまない、ともみんはまだ14歳だというのに。」

そう、僕らはまだ成人すらしてない子供の集団、平均年齢17歳ののだ。

ちなみに、ともみん以外はみんな18歳である。

「そんなことないわ！カズ。あなたがいなかったら私たちの命なんてもうない。それに、私たち姉妹だって父や母を殺されてあいつら（騎士団）が憎いわ！同意してついてきているのだから！」

笑顔でミッチは言った。

「みんなあ！食糧を見つけてきたぞ！！さっ、早く料理してくれ、ミッチ、ともみん。」

ハッシが笑顔で鹿を担いで帰ってきた。

「よし！今日は僕も手伝うよ！行こ！ミッチ。」

僕は笑顔で言った

「うん！」

僕らは戦うんだ、あいつら騎士団と！

続く。

姉妹というのは

ご飯を食べ終わった僕たちは。

次の拠点や騎士団対策を考えるため、作戦会議を行っていた

「カズ、こちら辺には、食糧が少ない。騎士団のやつらのせいだ！もうここを離れたほうがいいんじゃないか？」

ハツシは、苦笑いを浮かべ言った。

「そうか。それもいいが、ともみんの体を考えるとなかなか判断はだせないんだ。」

みんな下を向いた。

「ともみんは！私が責任を持って連れて行きます！重荷なら捨てて行つて結構です。私たち姉妹のせいで判断だせないなんて言わないで！」

ミツチは言った

僕らはなんて、頼りにならないんだろう。

悔しくて、悲しくて

二人の姉妹を守ることもできないなんて。

「行こう！俺たちが守ればいい！おんぶすればいいんだ。騎士団にやられる前にあいつらを倒すんだろ！カズ！！行こうぜ」

シュウスケがいきなり大きな声で言った。

僕は隊長なんだ、弱気になんな。

僕は自分に言い聞かせ言った

「行こう！あいつら騎士団を倒すために！明日出発だみんな気合をいれる！！！！」

「おう！」（みんな）

山の中で僕らの声が響いていった。

朝、出発をした俺たちは北に向かった

ある、知り合いにあうためだ、彼に会えばなにか魔法に打ち勝つ秘策を教えてくれるはずだ。

「ラン、ララン、ラララン」

ともみんな陽気に歌い始めた。

ともみんなの歌はみんなを癒してくれていた。

僕らはともみんなの歌が好きだ。

だから、僕たちは守るんだ。

約30キロは進んだだろうか、雪がちらつき始めた、ここは年中雪がふっている。

その名も『フリーズダストギネハス』というらしい

「なんか、寒いよ」姉様！」

「しょうがなわね、私のローブを着なさい。」

ミッチは自分の服をとみんなに被せた。

「あつたかあい」

ともみんな笑顔で頬を染めながら走り回って言った。

「ミッチ！俺の服着ろよ。女が体冷やすんじゃないええ！」

僕はそつとミッチに服を譲った。

「カズ。いいのに……ありがとう。」

ミッチはちよつと恥ずかしそうに、言った

「あとちよつとだ、みんな頑張れ！」

シユウスケが言った。

小屋が見えてきた。

あれが、北の錬金術師。『ガーネット』の小屋なのか。

昔、魔法ができる前に錬金術というものが世に広がった。

だが、信じる者もおらず、すぐに名は錆びついていった。

話によれば、ただのペテン師だという噂が広まった

ことにより、風化していったらしい。

だが、今の世の中、錬金術は最後の頼り

僕らは小屋のドアを叩いたのだった。

「すみませえーん」

「だれかいませんかあー」

声を上げて言った。

「なんだ？騒騒しい！今あけるから待ってけや」
なんか図太い声が。

「怖いよー姉様あゝ」

ともみんがミツチの後ろに隠れた。

すると、小屋の中から大男が出てきた。

「なんだ、お前たちは？俺になんのようだ。」

図太い声で言った

「僕たちは、騎士団から逃げ、あなた。いや錬金術師に会いに来たんです。」

大男は驚いた表情で俺たちを見て言った

「錬金術？お前ら信じているのか？そうかそうか、そうだよな、やつぱり錬金術って必要だよな。だがな師匠は死んだよ。俺には錬金術は使えないんだ。あてにしてくれているのに悪いが、俺には何もできん。」

大男は言った。

「なんで、使えないんですか？教えてもらっただんじやないんですか？」

ミツチが急に詰め寄って言った。

「それは、俺にセンスがなかっただけなんだ」

「なら私に教えて！」

ミツチは必死だった。

「どうしたんだミツチ？おかしいぞ？」

「カズ、私言ったでしょ、ともみんを守るって。そのためには力がある。だから錬金術を習うの！」

ミツチは本気だった。

「教えるのはいい、だができるか、できないかは保証はできない、運が悪ければ体が消滅するかもしれない。覚悟はできているのか？」

「ええ！」

ミツチは言った。

「そんな事！ミッチ考え直せ。僕らは君を失うことはできない。」
「カズ、お願いやらせて」

ミッチは透き通ったブルーの瞳を僕に向け言った

「おっさん！ミッチを錬金術師にしてやってください。」

僕はミッチに何も反論できない、俺たちには力がないからだ。
なんてふがないんだろう。

このモヤモヤの気持ちをどうにかしたいけど、できないのだった。
「できるだけのカバーはしよう。」

大男は言った。

5日たっただろうか、ミッチは錬金術の修業を始め、まだ小屋から
出てきてはいなかった。

僕らは心配だった。

そして一週間たったとき、ミッチが小屋から帰ってきた。

ミッチは笑顔で言った

「私！錬金術師になって帰ってきました。みんな！ただいま！」
みんな、ミッチに駆け寄っていった。

「姉様。ともみは寂しかったです。」

「ごめんね。ともみ、私があなをずっと守るからね。」

姉妹というのは強いものだ。

僕らはそう思った。

「さてと、いいですかあ！」

シュウスケが言った。

僕らは次は東に向かう。

そこには、動物を操り仲間にし、それを武器にしている民族がいる
らしい。

僕らは歩いた。

まだ、日が上がるうとしていない時に。

騎士団をさけながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8665s/>

セブンスポイズン

2011年10月9日01時42分発行